研究報告

秀明大学看護学部紀要
P.19-26（2023）

現場とつながるオンライン高齢者施設実習の成果と現状
～コロナ禍でのオンライン実習における施設実習指導者の認識～
Outcomes and Current Status of Online Practical Training at Elderly Care Facilities；Recognition of facility training instructors in online nursing training during COVID-19

石津仁奈子[1)]　Ninako Ishizu
石川りみ子[2)]　Rimiko Ishikawa
江口恭子[1)]　Kyoko Eguchi

要　旨

オンラインで実施した高齢者施設での看護学実習における指導者の認識を明らかにし、実習施設との協働連携を検討する目的で、実習後に指導者にインタビューを行い、得られたデータの内容分析を実施した結果、以下について明らかになった。

１．指導者は、【実習準備としての動画撮影、受け持ち高齢者選択、カンファレンス参加への工夫】を行い、【認知症高齢者へのZoomを用いたコミュニケーション効果】や【討議や動画の繰り返し視聴によるオンライン実習での学修効果】を認識することによって指導者としての満足感を得ていた。

２．実習指導を通した介護専門職としての気づきは、【自己成長の自覚】につながり、指導者としての満足感を促進していた。

３．指導者は、実習準備や学生の実習指導による成果を認識することで【大学との協働によるオンライン実習を作り上げた実感】を得ていた。

以上のことから、オンライン実習であっても、実習の準備も含め、協働で実習指導を行い、それを実感することによって良好な指導体制が得られると考える。

キーワード：新型コロナウイルス、高齢者施設、オンライン実習、実習指導者、協働

Key Words：COVID-19, Elderly care facility, online training, Practical training staff, Collaboration

Ⅰ．はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下COVID-19）は、2019年11月に中華人民共和国湖北省武漢で初めて確認され、その後全世界へ拡大した。2020年１月に世界保健機関は「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言し、急速に広がる感染に対して警鐘をならした。

しかし2020年２月の文部科学省と厚生労働省が連名で出した「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」[1)]を受け、実習施設の確保が困難なこと、学生の安全確保・感染予防の観点から、2020年度前期の本学における全ての看護学実習は臨地で実施しないという大学決定がなされ、４月に学生に通達された。

このような緊急下において、「実習施設等の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に変えて演習または学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない」[1)]という通達から、本学ではPCを用いたオンライン実習を実施することになった。この決定を受け、実習施設責任者および実習指導者（以下指導者）と、事前に綿密な打ち合わせを実施し共に学修方略の検討を行い、準備から実際の指導を協働し行った結果、全学生が実習目

1）秀明大学看護学部
1）*Faculty of Nursing, Shumei University*
2）清泉女学院大学看護学部
2）*Seisen Jogakuin College, Faculty of Nursing*

標を達成することができた。

池田ら[2]は、臨床実習における学生について、指導者が「積極的に実習に臨む姿勢の乏しさ」「自分で考える姿勢の乏しさ」などのネガティブな学生像を捉えていることを明らかにしている。また、荒井ら[3]、白木ら[4]の研究でも、実習指導役割への負担が明らかになっている。一方、負担もあるが、実習指導が看護の質向上につながる認識[4]や、実習指導にやりがい[3]を感じ、学生との関わりにより自己の看護を振り返る[5]機会になっていることも明らかになっている。しかし、コロナ禍のオンライン実習についての指導者の認識や、看護学実習を指導する看護職以外の指導者の認識についての先行研究は見当たらなかった。

そのため、COVID-19 拡大に伴う緊急下においてオンラインで行う看護学実習に対する指導者の認識について明らかにすることは、今後のオンライン実習を含めた実習施設との協働連携を検討するうえで意義があると考える。

Ⅱ．研究目的

オンラインで実施した高齢者施設での看護学実習における指導者の認識を明らかにし、実習施設との協働連携を検討する。

Ⅲ．倫理的配慮

高齢者施設の施設長及び指導者に文書および口頭にて研究目的・協力の任意性、匿名性等を説明し、研究参加の同意を得て実施した。

なお、本研究は、所属大学の研究倫理審査委員会の承認を得ている。（秀明大学研究倫理委員会　承認番号　20E001A）

Ⅳ．研究方法

1．研究デザイン

インタビューガイドを用い、半構成的面接法を用いた質的記述的研究

2．研究方法

1）研究対象者

A 高齢者施設でオンライン実習指導にあたったスタッフ４名

2）調査期間

2021 年１月～３月

3）データ収集方法

依頼に応じた指導者に対して、研究者自身が30 分から１時間程度、Zoom にて、インタビューガイドに沿って個別インタビューを実施した。Zoom でのインタビューは、学内でケーブル接続したパソコンを用い、会議パスワード機能の有効化、待機室経由での参加など、推奨されるセキュリティ対策をとったうえで実施した。

4）データの分析方法

Zoom を介した半構成的インタビューによって得られた音声データを文字データに変換し、逐語録を作成しコード化した。コード化する際には、不要な接続詞や繰り返し等の削除など、意味内容を変えないよう留意し、修正を行った。コードと原文を照合し、意味内容が変わっていないことを研究者間で複数回確認した。さらに意味内容に沿って内容分析し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。その際には、研究者間でディスカッションを行い、合意が得られるまで検討し、妥当性を確保した。

3．対象施設と本学との関係性

本学看護学部は、2017 年度の開設当初から、大学・高齢者施設相互の見学、授業における入所高齢者との交流、大学祭における大学・高齢者施設共同企画の実施、高齢者施設への介護研修教材（高齢者体験セット）の貸借など、折に触れて相互の施設を訪れる機会を持ち、関係性の構築に努めた。また、実習に向けての準備として、指導（予定）者にフォーカスグループインタビュー[6]を実施していた。これらの交流を通して、折に触れて指導者の指導観や、専門職者としての考えを聞く機会を得ていた。

Ⅴ．結果

1．インタビュー対象（表１）

本実習に指導者として直接実習指導に関わった A 施設の４名。20 代から 40 代の男性３名、40 代の女性１名である。職種は、介護支援専門員、相談員、介護士である。当該施設における勤務経験はインタビュー実施時点で７年から 18 年だった。看護学生の実習指導については全員が初めてであった。

2．コロナ禍でのオンライン実習における施設実習指導者の認識（表２、表２の続き）

インタビューの内容分析の結果、136 のコードが得られ、20 のサブカテゴリー、10 のカテゴリーが抽出

表１　研究対象者の背景

	性別	年齢	職種	実習指導経験
A	男性	30代	介護福祉士、ケアマネジャー、生活相談員	なし
B	男性	30代	介護福祉士、ケアマネジャー、生活相談員	なし
C	女性	40代	介護福祉士、ケアマネジャー、生活相談員	なし
D	男性	20代	介護福祉士	なし

された。以下、本文中のカテゴリーを【　】、サブカテゴリーを〔　〕インタビューコードを〈　〉で示す。（　）内はコード数を示す。

【実習における看護学生の学修姿勢】では、〈看護学生は看護師になりたいという意志がしっかりしている。〉などの〔明確な看護職への志向〕や、〈ナースも困惑するほど、学生からの鋭い質問があったので、本当に学生は勉強しているとすごく感じた。〉というような〔学生の考察力と積極的実習姿勢〕に対する認識を持っていた。また、〈学生の最終カンファレンスでは、入所者のプランを立てるのに、看護師を含め多職種が関わっていることについて聞き取れる部分があった。〉というような学生の〔多職種連携の学び〕を感じ取っていた。

【指導者として学生に学修してほしいこと】では、〈看護と介護は違うかもしれないが、一緒に連携し協力し

表２　コロナ禍でのオンライン実習における指導者の認識　（　）内はコード数

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード例
実習における看護学生の学修姿勢（21）	明確な看護職への志向（2）	・看護学生は看護師になりたいという意志がしっかりしている。
	学生の考察力と積極的実習姿勢（16）	・施設で暮らしている高齢者の状況をよく組み取ってその中で看護がどう関わっていくのかまで考えている発表があったので、考察力がすごい、よく学んでいると感じた。 ・（看護業務に関してZOOMでの質疑応答では）ナースも困惑するほど、学生からの鋭い質問があったので、本当に学生は勉強しているとすごく感じた。 ・実習生からのいい質問が多くて、一度グループとか個人で考察した後に、こういう意図があってこういう声掛けしたんですか？というように、ある程度答えを導き出してから、こちら側に意見を述べていた。
	多職種連携の学び（3）	・学生の最終カンファレンスでは、入所者のプランを立てるのに、看護師を含め多職種が関わっていることについて聞き取れる部分があった。
指導者として学生に学修してほしいこと（25）	協働することの重要性（6）	・実際の現場でもチームで協力して業務を行うので、学生もグループメンバーでの話し合いが大切とすごく感じた。 ・看護と介護は違うかもしれないが、一緒に連携し協力しながら、意見を出しあって仕事をしていることを学んでくれたらうれしいし、しっかりと伝えていきたい。
	学生に伝えたい認知症の対象への対応（6）	・（認知症の対象には）否定せず、状況を一回整理するということを心に置いている。 ・行動や言動の意味を考えて接するようにしている。
	対象の背景や性格を踏まえたコミュニケーションの重要性（7）	・高齢者と話すときは、その方の性格とか、人格とかがわからないと話がつながっていかないので、どんな話題なら高齢者が話してくれるかとかは学んでほしかった。 ・裏側にある背景とか、環境とか、家族との関係とか、そういう深堀ができるようになってほしい。
	退院後を想像し社会資源を伝える重要性（6）	・退院後のことを一番高齢者は気にしているので、病院内で社会資源のことを看護学生が話してくれたら高齢者は安心して在宅に戻れるという希望はある。 ・（患者が、病院から）帰ってきた時を想像してもらえると嬉しい。
学生に求める看護師像（3）	学生に求める看護師像（3）	・たまにしか顔を見せない人と毎日顔を見せる看護師だったら毎日顔を見せる看護師のほうが話しやすいことを、将来働いた時にも振り返れるようにイメージして実習にかかわった。

表２の続き　コロナ禍でのオンライン実習における指導者の認識　（　）内はコード数

適切な 受け持ち高齢者選定 ができた満足感（9）	適切な 受け持ち高齢者選定 ができた満足感（9）	・看護学生の実習受け入れは初めてだったので、どんな情報を提供したらよいかすごく悩んだ。 ・（受け持ち入所者は）現場の職員と相談しながらうまく学生の学びにマッチングする人を見つけた。 ・受け持ち対象が三者三様で、認知症で（コミュニケーションが）高度に難しい人と中度の人とちょっと難しい人というように分けられていて、人選的にはよかったと思う。
実習準備としての 動画撮影、 受け持ち高齢者選択、 カンファレンス参加 への工夫（26）	実習施設の日常の臨場感を出すための動画撮影の工夫（19）	・実際に施設に実習で来たときに施設で見学するだろう場面を撮影した。 ・生活の一連の流れの中で、学生が見てわかりやすい場面をピックアップした。 ・社会資源の一つとしてこういうサービスがあること、日中過ごす雰囲気だったり職員との関わりが学生に伝わればよいと（思い）撮影した。
	学生の理解を深めるためのレクチャーの事例の選定の工夫とカンファレンス参加スタッフの人選（7）	・社会資源のレクチャーでどんな事例をあげようかすごく悩んだ。 ・家族の意思で入所する方が多いので、本人の声を聴きながら家族も含めて入所につながったケースはすごく少ないという点でいい事例を出せたと思っている。 ・多職種会議の場面で、専門職から専門的な意見をもらうのは、日常的にやっているので、（現場を）わかる人間が直接（オンラインカンファレンスで）質問に答える方が学生が緊張せずに質問できたと思う。
認知症高齢者への Zoomを用いた コミュニケーション 効果（8）	認知症の受け持ち高齢者のZoomを用いたコミュニケーションへの不安（3）	・（Zoomでの遠隔コミュニケーションは）利用者にとって、人と話している感覚があるのか不安があった。 ・Hさんと学生のZoomでのコミュニケーションがあったが、カメラ越しだと、人と話している感覚があまりないというのがわかった。
	受け持ち高齢者とコミュニケーションがスムーズにいくための環境づくり(2)	・高齢者と学生が直接話して、まず学生が高齢者の言っていることがわかるか、高齢者は、うまく話をあわせる傾向があるので、そういったときに少しサポートした。 ・学生が高齢者とうまく話せるようにあえて自由に話してもらった。
	Zoomによるコミュニケーションが受け持ち高齢者に及ぼす影響（3）	・高齢者も（Zoomでのコミュニケーション機会があることで）活発に動けたりとか、学生とうまく話ができたりとかそういうのはすごくいいと思う。 ・自分も何かの役に立てるとか、人の役に立っているということによってしゃきっとするのですごく大事だと思う。
討議や動画の 繰り返し視聴による オンライン実習の 学修効果（10）	討議や動画の 繰り返し視聴による オンライン実習の 学修効果(10)	・話が発展しなかったり、なかなかつながらなかったこととかがあり、コミュニケーションのむずかしさを学生たちは感じ取ったと思う。 ・臨地実習よりは深い意見交換できた印象がある。 ・シチュエーションを巻き戻したり、見返したりすることができるのでビデオを使用するのはとてもいいことと思った。
学生が学びやすい 雰囲気・関係づくり への配慮（3）	学生が学びやすい雰囲気・関係づくりへの配慮（3）	・実習はがちがちに一日を過ごすものではないので、私達は、先生より近い関係のほうが学生達も話や質問がしやすいと接していたつもりだ。 ・（学生の質問には）教科書通りではなくて現場目線で答えた。
自己成長の 自覚（16）	自己成長の自覚（16）	・今まで自分が実際に対応している姿を見たことがなかったので、第三者目線で見れたところがよかった。 ・社会資源の講義をするときは、再度私も確認したりとか、再度教科書を見て勉強したり、見直したりした。 ・学生から、利用者との関わりのなかで、その人との目線の高さとか、言葉の遣い方について感じたことをきいた時に、そういう部分が自分はなあなあになっていたと気づかされた。 ・入所者との普通のやり取りから、学生が授業で学んだミラーリングとか、センタリングとかいう言葉で考察していて、そういう表現をするんだと、学んだ部分もある

大学との協働による オンライン実習を 作り上げた実感 (14)	大学との協力関係による オンライン実習の実感 (7)	・先生たちも遠隔実習が初めてでお互いに手探りの中で意見交換し、先生からの実習の狙いの指示をもらえたので、うまくいったと思っている。 ・今までの関係性があったから、この実習ができたかなという感じ。これ聞いていいかなとか、あれはどうしたらいいんだというのがなかったので、そのあたりがよかった。
	指導者としての 満足感（3）	・オンラインのよいところ悪いところそれぞれあると思うが、今できる最大限のことは取り組めたと思って満足している。
	実習協力への意思表示（5）	・遠隔実習に協力できてうちもうれしいので、何かあれば言ってくれればできる限り協力する。 ・機会があれば是非とも何回でも参加したいと思っている。

ながら、意見を出しあって仕事をしていることを学んでくれたらうれしいし、しっかりと伝えていきたい。〉と〔協働することの重要性〕、さらには、〔対象の背景や性格を踏まえたコミュニケーションの重要性〕や〔退院後を想像し社会資源を伝える重要性〕を学んでほしいことが語られた。また、〔学生に伝えたい認知症の対象への対応〕については〈（認知症の対象には）否定せず、状況を一回整理するということを心に置いている。〉などが語られた。【学生に求める看護師像】では、〈たまにしか顔を見せない人と毎日顔を見せる看護師だったら毎日顔を見せる看護師のほうが話しやすいことを、将来働いた時にも振り返れるようにイメージして実習にかかわった。〉など〔学生に求める看護師像〕が語られた。

【適切な受け持ち高齢者選定ができた満足感】では、〈看護学生の実習受け入れは初めてだったので、どんな情報を提供したらよいかすごく悩んだ。〉〈（受け持ち入所者は）現場の職員と相談しながらうまく学生の学びにマッチングする人を見つけた。〉など、指導者が悩みながらも学修目的にあった対象を選定し、〔適切な受け持ち高齢者選定ができた満足感〕を得たことが語られた。

【実習準備としての動画撮影、受け持ち高齢者選択、カンファレンス参加への工夫】では、〈生活の一連の流れの中で、学生が見てわかりやすい場面をピックアップした。〉など実習目的に照らし合わせ〔実習施設の日常の臨場感を出すための動画撮影の工夫〕をしていたことが語られた。また、〈家族の意思で入所する方が多いので、本人の声を聴きながら家族も含めて入所につながったケースはすごく少ないという点でいい事例を出せたと思っている。〉と〔学生の理解を深めるためのレクチャーの事例の選定の工夫とカンファレンス参加スタッフの人選〕を行っていたことが語られた。

【認知症高齢者への Zoom を用いたコミュニケーション効果】では、〈（Zoom での遠隔コミュニケーションは）利用者にとって、人と話している感覚があるのか不安があった。〉というように〔認知症の受け持ち高齢者の Zoom を用いたコミュニケーションへの不安〕を持ちながら、場面の調整をしていたことが語られた。また、〈高齢者と学生が直接話して、まず学生が高齢者の言っていることがわかるか、高齢者はうまく話をあわせる傾向があるので、そういったときに少しサポートした。〉と実施の際は、〔受け持ち高齢者とコミュニケーションがスムーズにいくための環境づくり〕に努めていた。〈自分も何かの役に立てるとか、人の役に立っているということによってしゃきっとするのですごく大事だと思う。〉と高齢者にとってのコミュニケーションの意味を考え、実施後の反応を見て、〈高齢者も（Zoom でのコミュニケーション機会があることで）活発に動けたりとか、学生とうまく話ができたりとかそういうのはすごくいいと思う。〉と〔Zoom によるコミュニケーションが受け持ち高齢者に及ぼす影響〕を評価していた。

【討議や動画の繰り返し視聴によるオンライン実習の学修効果】では、〈シチュエーションを巻き戻したり、見返したりすることができるのでビデオを使用するのはとてもいいことと思った。〉など〔討議や動画の繰り返し視聴によるオンライン実習の学修効果〕の認識が多く語られた。

【学生が学びやすい雰囲気・関係づくりへの配慮】では、〈実習はがちがちに一日を過ごすものではないので、私達は、先生より近い関係のほうが学生達も話や質問がしやすいと接していたつもりだ。〉など〔学生が学びやすい雰囲気・関係づくりへの配慮〕し、指導にあたっていたことが語られた。

【自己成長の自覚】では、〈学生から、利用者との関わりのなかで、その人との目線の高さとか、言葉の遣

い方について感じたことをきいた時に、そういう部分が自分はなあなあになっていたと気づかされた。〉〈入所者との普通のやり取りから、学生が授業で学んだミラーリングとか、センタリングとかいう言葉で考察していて、そういう表現をするんだと、学んだ。〉など、実習指導を通して〔自己成長の自覚〕をしていることが語られた。

【大学との協働によるオンライン実習を作り上げた実感】では、〈先生たちも遠隔実習が初めてでお互いに手探りの中で意見交換し、先生からの実習のねらいの指示をもらえたので、うまくいったと思っている。〉と〔大学との協力関係によるオンライン実習の実感〕を持っていることが語られた。〈オンラインのよいところ悪いところそれぞれあると思うが、今できる最大限のことは取り組めたと思って満足している。〉と〔指導者としての満足感〕を持ち、〈遠隔実習に協力できてうちもうれしいので、何かあれば言ってくれればできる限り協力する。〉と〔実習協力への意思表示〕が語られた。

Ⅵ. 考察

本研究では、指導者のオンライン実習の認識を分析することにより、指導者と大学が、準備から実際の指導を協働し行うことで、臨地実習に近い成果が得られることが明らかになった。

石川ら[6]が当該施設で行ったフォーカスグループインタビューの結果から、実習開始前の指導者は、「看護学実習の経験がないことから、実習の受け入れに戸惑いを感じている」ことが明らかになっている。しかし、今回指導者はオンライン実習での指導に携わり、質疑応答やレクチャー、カンファレンスの参加を通して、学生が真摯に実習に取り組む姿勢を感じとり、〔学生の考察力と積極的実習姿勢〕に対する認識を持ったことが明らかとなった。

中本ら[7]は、臨地実習において「学生はディスカッションの進め方が未熟であり、活発な意見交換を行うことに強い困難感を抱いている」と述べているが、本実習のカンファレンスでは、Zoom 越しではあるが、すべての学生が自分の意見を述べ、他者の意見を聞きつつ、かなり深く活発な意見交換がなされていた。河野ら[8]は、オンライン実習は、「直接患者や看護師と関わることがないため、臨床現場における緊張感や感情面での情緒的な学びは得られにくいことが推察される」と述べているが、本実習では、Zoom での受け持ち高齢者とのコミュニケーションを通して対象の反応を見ながら言葉を選択する、反応を待つなどの対応をとる体験ができた。また、レクチャー後などに指導者や看護師に直接質問をしたり、対象との関わり（動画）の場面のアセスメントを聞くことができる時間があり、そこから学ぶ機会があった。このことが活発なカンファレンスでの意見交換に繋がり、指導者が〔学生の考察力と積極的実習姿勢〕に対する認識をもつことにつながったと考えられる。

オンライン実習になると決まった時点で、大学は実習目標達成のための方略を検討した上で施設との協議を重ね、実習目標を共有し、協力を得て実習に臨んだ。オンライン実習であっても、実際の受け持ち高齢者とのコミュニケーションの機会や、高齢者施設で働く職員との双方向的なやり取りができる機会は、臨場感のある体験となり、そのことが学生の積極的実習姿勢につながり、深い学びになったと考える。

以上から、今後の実習指導においても、大学教員は実習施設・学生双方にしっかりと実習目標を伝えること、適切な実習方略・教材を選択することが重要である。そのうえで指導者は、目標達成のためにどんなことを学ばせたいかを明確にし、大学と協働し実習指導に臨むことが、指導者としての満足感につながり、学生の実習における学修をさらに深化させることに繋がると考える。

今回の実習において指導者は、大学の高齢者施設実習の目標についてよく理解し、実習準備として、受け持ち対象の選定、施設の日常の動画撮影、施設における看護業務や社会資源のレクチャーの調整を実施した。提供を受けた動画は、スタッフが高齢者と尊厳を踏まえたコミュニケーションをとっている場面、対応が難しい認知症高齢者との関わり場面、施設におけるプライバシーの配慮場面などが含まれていた。

石川ら[6]の研究では、高齢者施設実習における指導者の役割として ＜倫理観や道徳観を教える＞＜目標を達成するよう導く＞＜認知症高齢者ケアの実際を伝える＞＜連携としての指導者の役割＞などがあることを明らかにしている。提供された動画には、＜倫理観や道徳観＞＜認知症高齢者ケアの実際＞を学ばせたいという指導者の意図が反映されていた。このように指導者が教育的で明確な意図をもって実習用の動画を撮影したことが、＜目標を達成するよう導く＞ことに繋がったと推察される。

施設スタッフと認知症高齢者とのコミュニケーショ

ン場面が動画の中に複数あったが、多くの場面で高齢者の尊厳を踏まえた学生のロールモデルとなるような対応を見ることができた。高塚ら[9]は「患者への関わりのあり様や人としてのあり様の側面において、臨床指導者のロールモデル行動が高いことを示唆している」と述べている。指導者は、実習目標の一つである「認知症など生活機能障害のある高齢者とその家族を全人的に理解し、尊厳ある態度で接することができる」ことを意識し、教材作成を行っていたと推察される。

この目標から、受け持ち高齢者は、認知症があり、学生とコミュニケーションがとれる対象を選定していた。実際の高齢者とのコミュニケーションを Zoom で実施したときに、三者三様のコミュニケーションの難しさがあり、個別性を踏まえたコミュニケーションを学ぶのに適切な高齢者であった。実際の場面でも指導者は、コミュニケーションがとりやすい雰囲気作りを行い、その後の高齢者の良い反応から、高齢者選定に満足感を得ていた。

また、実習への参加を通して、指導者自身と高齢者との日常の関わり方について学生の発言から気づきを得たり、高齢者との関わり方の新たな知見を得る機会となっていた。このような実習を通した介護専門職としての気づきは自己成長につながり、その自覚が〔指導者としての満足感〕を促進していると推察された。

以上から、教材準備や受け持ち対象選定に始まり、共に大学と協働し実習指導に関わったというオンライン実習を作りあげた実感が、指導者としての満足感や実習指導協力への意思表示につながったと考える。すなわち、オンライン実習であっても、実習の準備も含め、協働で実習指導を行い、それを実感することによって良好な指導体制が得られると考える。

Ⅶ. 結論

１．指導者は、【実習準備としての動画撮影、受け持ち高齢者選択、カンファレンス参加への工夫】を行い、【認知症高齢者への Zoom を用いたコミュニケーション効果】や【討議や動画の繰り返し視聴によるオンライン実習での学修効果】を認識し、指導者としての満足感を得ていた。

２．実習指導を通した介護専門職としての気づきは、【自己成長の自覚】につながり、指導者としての満足感を促進していた。

３．指導者は、実習準備や学生の実習指導による成果を認識することで【大学との協働によるオンライン実習を作り上げた実感】を得ていた。

Ⅷ. おわりに

本研究のインタビューは、オンライン実習終了後に、１施設の指導者４人に対して実施したものであり、研究結果から得られた知見には限界がある。しかし、実習指導における学生との関わりを通しての実習指導者の認識について一定の示唆が得られたと考える。コロナ禍において、実習が臨地で実施できることが当たり前ではなくなった今だからこそ、臨地の実習指導者と連携を深め、実習目標達成に向けて協働していく必要がある。

研究を進めるにあたって、ご協力いただきました A 施設のスタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究における利益相反はない。

引用文献

１）文部科学省　厚生労働省（2020.2.28）：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について〈https://www.mext.go.jp/content/202000302-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf〉

２）池田七衣，新井祐恵，冨澤理恵，他：看護基礎教育に関わる教員および実習指導者の意識，千里金蘭大学紀要，11，35 - 47，2014.

３）荒井葉子，田村美子，西岡美作子，他：はじめて看護大学生を指導する実習指導者の役割認識，看護・保健科学研究誌，11（1），31-39，2011.

４）白木智子，田邉直美：看護専門学校と臨地実習施設による臨床指導者研修前後の看護師の教師効力，日本看護学会論文集看護教育，37，185-187，2006.

５）平井実希，鍋屋知枝子，廣田美希，他：専任制と兼任制を併用した臨地実習指導体制の導入による看護師経験５年以下のスタッフの意識の変化，日本看護学会論文集看護教育，48，95-98，2018.

６）石川りみ子，江口恭子，石津仁奈子：高齢者施設における実習指導者の老年看護学実習に対する認識と実習環境 －フォーカスグループインタビューの分析をとおして－，秀明大学看護学部紀要，3（1），9-20，2021.

７）中本 明世，伊藤 朗子，山本 純子，他：臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較　基礎看護学実習と成人看護学実

習の比較を通して，千里金蘭大学紀要，12，123-134，2015.

8）河野貴大，大山末美，兼子夏奈子，他：慢性看護学実習における遠隔実習プログラムの構築と実践，聖隷クリストファー大学看護学部紀要，29，77-84，2021

9）高塚由香里，永井由美子，山川正信：看護学実習における臨床指導者の役割に関する研究，大阪教育大学紀要 第 III 部門 自然科学・応用科学，63（1），103-111，2014.